笑談貧福軍記

三編 中

遠3
1897
8

へ遠13
1897
8

笑談貧福軍記三編巻之中

一荷堂主人戯編

浪華

第八回

恩愛ふ迫りて胸吉貧者の好討ふ酷る

去程ふ街髪結之丞助成ハ日頃計策今ハそや。おとハ九
まく仕員ヒてきべ唯この上ハ徒姫を味くところ〜てこま
具又山子の御ふ走らんのと且暮意ふ立風をとぶし。
惑夜可霄ふ忍びあひ〜。耳側ちゃくさ〜ゆ乞けるべ。
其方ゞヒつるそ〜乞ふ。手ふり難さいぶ〜難

望のごとくあひることと。是ふ過るる喜びなりとへえめ
の是まぐれ忍びこの事ども逢のこるまべ真底媒樂つく
せーーとまく。夫ふ附る慮ふハ其前ふる。そるまる語り
ためせーーどく。何卒いざーーく徒姫を得心さとく那を
見合せ。おろふ連ざーー隱ーー置べ身吉夫婦いかどろに
つ。定ーく手なーく尋問べーー。其節ハ身ハ家ふなりく。
そまとなるさぐ遠くのら。唯何夏る媛ふころせ。のまぐ
仕出ーー話ーーふりふ。聽さべハ直地ふ我ぐ行へを。たづ孫

あとむる其折ぐふ。萬事を姫ハ云ふくに。ハ鼻ぐ者當の
文章を書せ其在所を告ちぐせ。ハ身をひそのふ招ふと
べーー。夫を両親ふ見ちるとにハ。のるるぐハ餘人をつうハるべ
ーーく。そるるを迎ひふ越をとハ。鏡ふあけくーんるるエーー。
そまを手蔓ふとを謀ふと。お足まりの古文ハ。ものの人
ふるでハ又からの男ハ忌ぐや添きどべ此まーー死ぐ仕舞
ふとと。時代めるーーるせるふふ持とこ。媛ふ十分まりハせ。
夫ぐく此方の大擬關。黄金衣類を仕かるーーせ。破をこぶ

きを幸ひ。そゝくる一所の詭住居。心のまゝの栄耀を
〜。夫を楽〜とふ何とする。此一件ハ兎ふるくふ。世身ゞ
働きひとつよあまべ。このるゝ具よけゞ〜きく。仕損じの
ゐ化やうふ。升ふひゝるまへとそちむきべ。原より下地ハそれの
路。ゐまゝ男の乃意ハよ〜。否とするゐ氏詰引く尚も
互ひふ示〜合せ。此夜を別きく其のちハ。ゐとよ化節
を見合ゝ。徒姫を連いさうと。他更るく心を回ゞ
る。日月あゞ〜る止る隙ゐく。鼠尾草蓮葉の祭る

をゝく時〜る秋の最中とゐゝ。鬼鹿野の服をゝ人
物と廣井の息女徒姫ハ昼のうちより掃きゞゝを可習
をゝ〜夜ゝ〜の婢女。自ゝ好むゝ身を艶〜。夕暮頃
ゐゝ舟ゐ掉さ〜。彼淀川を漕のゞるゐ。殊ゝ今宵ハ清
光るゝ。さやゝ化月景水上をてゝ〜。騒人墨客舟をつ
どへ詩を賦をゐまへ歌を吟じ。糸竹のゝべ。哥数の
妙音風よつゝへ耳ふさえぎゝ其絶景いうゝくるゝ。徒
姫るゐゝえつくせど。此夜ハ附人とふゝ。彼艶男を

連さまこそ。唯何とるく遊樂さ。物をもしらぬやうとる
を。可哀くそまこと悟をる。人目もあきへ他事わつけ。
ゐごさえゐゐく居ゐ子ふ堤の月も奥ゐるべ〜こそめ
く舟を岸よりとさせ。徒姫を先よ〜く。舟をこのぐて露
草よ。裾をぬらしつ樋の方の塘を遠近見ゐ。ちら。
月さえ高く澄のわを。初更の鐘の音ゐこゑる。是首ゐ
結ゐ歌助成へ。今朝しる可哀う内通ゐく。今宵月見
ゐ彼媛ゐ此所よ来ゐと知ゐへ是ゐられひの時来ゐまう。

ゐひての本望此夜を延さと程よ此場所よ待らけて。姫
を首尾よく誘ひ出し。山子の里よ走るべ〜と。意のうち
よ首低つ身仕度ゐ〜〜夕間暮。とゐごどくゐ樋の口の
茶亭ゐ前より待らけく。あきこれ舟をゐらゐこを折ゐ
今此舟の岸よゐる。いゐつ〜姫ゐ上る姿を。たしゐふゐ
人のけよ紛ゐゐる附添ひくを。可哀八早くゐこゐ
つ此餘の姫よゐゐまぬゐう媛ゐ紛を引ゐゐ。そまと
彼方を目くをせそれべ。振向ゐふ不思ゐ。たゐひゐ合

を顔と面。姫へうまく〜さるるつ〜さふ。側の婢さへうな。
さくるの。あで〜ありとも話〜〜。かりくど今〜供人を。
先ゑ帰〜るるつ〜を〜〜く。あんをまふつの可愛ら〜〜く。
兎さん角さんあるうち。可霄ハぬうぐ目ぐあぐせ。姫
さこふ形ゑ行らるつとやといふゑ此方も心得く。婢共を
提ゑ待せ。可霄ハ手を引先ゑ立五手を下へとあを回く和
助成あとふ忍びつ。人眼を見合せ姫が手を。あつと握り
く。可霄ふひふ。あとハゆ身と示せ〜通を急度手答の

ふぶハぬ。サア姫さゑ。婆〜たとけハ落つく先ふ〜ゆるり
と話〜〜く。聞せよせう。人目ふ〜ぬ其うちゑ女も早くと。
急たくくるを。おもひまふけぬことるまべ一回む祢ハおとろけ
ど。命とこのけて好る男。何處へ往うハあくゆど。ふくり
一所へ漆るくべ。誓ひ野の赤山の奥。千尋の海のそるを
島。錦の褥とおもやるそいとで嬉〜くうちつまて。草
葉をこけて川堤足ふまうせ〜走アゆく〜。偖も可霄
ハ二人この場を失落させ。跡へのどをく。又さふ。さ

廣井の奥方

愛子をそ
らせく廣井
の鎹愁場
之圖
廣井三郎守胸記
嬖女
家臣

る躰よんせうけ。供人明軍呼つどへ。徒姫を不慮。うん
うゝゝゝるひとる面つをふゝ。周章たづぬるを。誰衆も是
を怪ら祢ば。互ひよ狼狽さうなだつ。吉を限りよ呼さてつ。
四方よ手をとけ走回ま。夫方よ此野よとさがせども。さるよ
行えるあまごれば。去ぐ此まゝ主人よ何と云訳とるべ
しやと。住方なりまべ面ゑんなとせ。唯啼きるだろを
ふゝ。哭ありわうのことぞなた。可霄も具よるぐを拭ひ。
何わどさがせど姫君のゑんへるまへぬふ毎まぐ。此首よかく

しゝ居るとて。何を他ありと待えらん。夜の更る程
舘よへ。案ゝ一ぐひまへんゝ。係変を聴せ
まふさべ。不忠のうえの不忠。殊ふ吾身へ為て
る。四両親まるり代り。何の姫君よ附えひるぐ。四行
衛さへるゝんゝ。是ゝる自ぐ落度ふ。
ちの罪よ。ぐ。ゝ。帰りて此まを。
の外へ。ゝ。ゝ。ゝ。是非るゝ。ゝ。意を休よ
せゝ可霄ぐ言葉よまを。以前の門迄立ての。

飛ばしめそぶ撞木一。玄中の頃より廣井ゐる。鎧を戻
ひたく條のよ一。主人は斯と告げまべ。時吉夫婦いゐる
くこゝふるり。家内上下ハ周章出入の者等を呼ばるゝ。
直地は後取は引ふべ一。人數を分ゝたづるさを。その
師ゆくゝ。白吉夫婦ハ。暴き風はゆ當ずと。日頃寵
愛ふがうゐる。一子の娘ゐ行方ゐまとべ。先ゐゐ和人
のごくふゝ。可爾を知らり。匂ふ。寢食をされ面
悲一こ。前後不覺の歎ゐこそ。實は理りとそ思ふを

ゐる。斯一く居ゐち。當家の老豆損島内瞞。一多と
ゐゝ。瘦井門十郎。病持指賀ゐど。各く夜中ゐ出勤
一ゝ。可爾その外數妻の婢女。不殘を立く呼つけて。
件の始末を聞孔一。何ゐる小首を傾ゐつ。是ぞとゐる
ぐふ刑もゐりまべ。正一く狐狸の仕業ゐる。且ハ恐びく、
密夫と。走りゐるゐる量りぐゐ一。若ゐることのゐるゐべ。
誰はゐもゐき知るよ一ゐゝん。何ゐゐるせよ藏をゐぐそ。
白地はゐふをべ一と。流石の長豆ゐ一ゐゐぐひ姐豆ゐ

孔明とまをす。可爾八原より深く包こ其余の者ハ誰あつて。このる訳ぞとまをるゆへ何と答る者もなく十方ふくまつて居るなり。やがて此夜も曉るころ。それ〳〵くぐ帰るとゝどいづきゆ知きぬとだろゆまをす。いや〳〵一同意を脳せ或ハト者ハ占ことせ又ハ神佛祈アるゆ費をいとゆとさるゆ〳〵ゆ便りのなるを待ちる。一族一門集會ひ。主人夫婦をいさとろつて。鬼うくゆ心をるゆさむきゆ。たゞ嘛去づこゝろつのゆ。さるゆ高聲ゆ爰ゆ名を呼立ゆゆゆて

さゝゝゝ

あるべき賤しき身業の助成。迚も両親のもるさきて。夫婦ふるまるべきことあらざるべし。思ひ切んとすれども。慈喜の愛ある止まへぐ〳〵。不孝の罪とハ知らるゝ。昨夜月見の折ふし。彼人共又走り来て。且あふの日ハ貪国の。山子の郷ハ恐るべき。定〳〵爺さまの。案じ給ふを推量り。せめてハ此儀昔人ぶるえん。二ツよいまゝ何くの。山〳〵あるふとあるべきべ。可爾ハ彼處へ来るべきよし。と長文と認らるを。讀あるゝてハ面人なるを。再回あるゝ

ゝ先このよしを主人ハ欺と。語せバ衛〳〵胸吉るをこゝ心を落つるを。奥方とるふ詰て合ひ。何ゝるせよ此うへハ。可爾を彼首ふつるゝ。姫ぶ心底を聽る上まるとゝ。〳〵〳〵。仮をべるべ。係きべ翌朝へとくるる山子のさと。ゝろいふ所へ往〳〵何ゝと媛ぶ意つぶさる明せ〳〵聞うへふ。〳〵速くも館へつきこるべ〳〵と夜ど具可爾ハいくゝ。真用意をぞいさゝるける。是ゝる成安助成ゞ。計畧ハ〳〵るをこゝへ夢ハる福方あぐるる

半水曰

偖是迚の條ハちと老實わる〳〵くゞぐし〳〵。定〳〵閲者のなくびせさまへんと。是首ふるふさう發をこの〳〵。助成徒姫と道行のゞん サヨウヲ

富本貧太夫両傳

偖ハ清ゞ孫ハこち

両婚ハ嫁

道あぶ

ハるいるせのとあ

三組の剛ハ縁ハ

貧福

髮結貧ゞ

正本所

戲文笑談中之巻十二目

貧福屋軍作

遊行　金の夢婦巻　元結　上下

おもひあらべひごとに相ゐるもの床たらふひとる
意見ふ。色ごとの中とまりまる。家ふらこそる
状の儒。そそでる呂以二人づき。金四目よそれとこの
のくらふむ風の福ぐるか。かまこ以ゑこ屋弁
とそのお夢のこの和ごとる。ゑびうるやいごらふ。
恨いおもひれこまる。多くと結ぶのこのひとつ
さけ成ふうまこそめて二世とお夢のよ形こいと

ろやはそ物の夜のあるおりひるゑ物ふこ
ふとこら稲ゑる。業の物ふつとる四。盆風にて
あぞふたうる月の物。ゑ屋ふたどうくてこる
まける　月今こそべる。の空ふこのる風ふの
らのうげふて。夜べやんゑそのもどふ夜ことが夜人
主題掛るいふるかまこ。ねのつまどゑんゑる下
ゑる。とけて。根巻のもどふ。合こらふるくこふ
るふ。お雪とゑるくいうの。好くこるこらこ

たるまこと為ゆゑ〜元結あをそのゆるとかをうまする
こげるまこべどうでうそ〜へ仮結ひと云おそらく
そ屏風ぐるまあけうをまこと金おすごとうそ光
一歩飛とびて二朱というこまそふかふへ西
千両箱ゆゑひうるやうまこと四国る仮
る大判のアノたくち弥ま手ゆるまこと
半〜身代つくるへ至光分銅ゆゑ仮ごくとそうでえ戦
わこのるこことあそう〜とうまぐらまこと

刀とこへ弥8枝ゆゑまるるこころをとうるそ〜の姫ゆゑ
巻中を拾つはそ。そのうるはこへりとるるまこと光
のこの手箱8のみんなうまこうらあること今まこら
たるまこと身はこべへ切るふこらまこと刺かとうおら
光まこべ〜こまこべ光ゆゑひるこころ流ひ髪さこひこと
中8むの手巻くそうてたの〜くこまこと踊ひるそて
まこのまこうこうこうまこでへ不流のれゆうるこまこれ
あとこうこれるこれんへれ経仮いのふこうこひこうる

とる。今ごろ長ふ笠を[illegible]とぴんとたうのまま
あとべ。[illegible]ひとまく娘とろまごり。[illegible]ごくまん[illegible]
[illegible]さん。あんぐーとぐーせひとえづのりやんやうる
るる。どうぞのもてやさん。中より長てひとへふ。
おまへよりぬさわをべ。ごこ高ーーこふ家業。
よそへのくさ草紙布。[illegible]ぐちゃくるる。と
[illegible]ふごこうさうこのいとぐろうのの紙紙ぐこて
ぴん附のこまぐるくるくふ。[illegible]とぐ長ーーた

社の後ろ。ぬぐちくるりまべ。ろまぐあるる
べたやよーるた人目ふのりてハ云葉のつやく紙ぐー
の貝るた法名せようねさた。[illegible]ぐまくるへとふる
をとり。志ごたをーめてうちあぐち。解搭のひるや
底石ぐ原毛接えをこれ宿を就へ云ぐーちを
ふ爰国は。山るの里ふぞ三重つたふりり

是首ふ貪方の大軍帥ユ面将盆成安へ。この称く助成と
示ーー合せーー如く。其謀計圖をたづさぐ。彼助成と徒姫へ

澄月ハ
いとこころ
墨之助

今朝しも此處へ来るまで。喜悦の面色仕さゝゝとく。とくよう用意やゝ置らん。近さ辺へ造作し風流えらせ〜庵を借らけ。爰へ二人を住居させ。所邑の庄宜を欺さゝ。夜昼万端しこう物ゝまで。調度のゝぐひよ不自由ゝ。同じ穴ゝ狐。奸智へ長〜雇き嬶婦を。下女へ仕立ゝこの〜づゝを。餅へ團子とりてゝ〜へ姫ゝ心を。ゝぐさえらきべ。たゞ深窓へ育ゝゝ人とゝのゝゝ徒姫。ゝゝ辺鄙の氣易さへゝ物毎へ愛ら〜。その上好さ艶夫と。身後へゝゝとゝゝとゝゝ。意の樂〜さ限ゝゝ。鑑へこゝゝとゝゝゝ。露ゝゝゝ居ゝらゝゝ件のゝの屆。さ〜や翌日可霄へ此家へ来り。兼ゝ約せ〜ことゝゝべ。附添さゝゝ供人を唯へゝゝゝゝゝゝ。先へ帰〜〜〜。のゝ。俗將監へ目へ人へゝ〜。其夜の條訳語り聽〜。ゝゝひへ笑坪へへらゝ。尚又將監へ風を回ら〜。可霄へそゝと呼ゝゝ。乃身へ一回鑑へゝゝ。俗両親へへ斯ゝ。門へ然ゝ〜と。言をゝゝゝ説諭せべ。可霄へこゝゝえ

其翌日館主このへのゝ駒吉イヂえん廣井の一門それゝゝ彼成
安ぎこゝ示せゝ通り。唯何ごゝゝ姫ゝこゝゝ誠ゝゝゝ云りゝハ。
兎くゝ姉君助成と夫婦ゝゝゝゝゝゝ再回
館ゝこゝゝゝゝと自ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ是と
つゝこゝゝゝ駒吉夫婦ハ當惑ゝゝ。それゝど好ゝ男ゝゝ。
此方ゝ引取養子とゝゝゝゝ。孫ゝゝゝれど。楽ハその性
貧方ゝゝ。緑組ゝゝゝゝゝゝゝゝ。我君福冨金持御
の方一上聞ゝ達ゝゝ。國家を土かのこゝゝゝ。富門の

けゝゝゝ。未代の恥辱。ゝゝ此上のゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
思ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。唯此上ハゝゝゝ。
世上ゝ浮名の立ぬやう。媛ゝ意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さる。格外よきまゝて免回〻廣井ふ云つゝハせど宋〻ふ心ゐ〻堂
のごゝく大金を山子の里へ仕贈りるを折〻家臣ハ是を止め諫言
する者ありとゝへど用めることさへなりけ。
此條いろとゝの〻。福方の大軍師。国弗仕間守金烏ホ。
聽へきべ。金烏大ひよかどろ〻容易ゐ〻る一大
事と。ひそろふ智計を回らーけるとるん

笑談貧福軍記三編巻之中 終